

メッセージアウトライン エペソ人への手紙2：1～10「神の作品」

パウロ(ユダヤ名サウロ)はイエス・キリストは自分を神と等しくする者だとして、そのイエスを救い主と信じるクリスチャンたちを迫害して捕らえて牢に入れる熱心なユダヤ教徒であった。→使徒8:1～3 しかし彼は外国のダマスコまでクリスチャンを捕らえに行く途中で死より復活したイエス・キリストに出会い、このお方こそ真の救い主であり神であると知ってイエス・キリストの救いを宣べ伝える伝道者となった。→使徒9:1～20

パウロは第3回伝道旅行の時に小アジアのエーゲ海に面したエペソで約三年にわたって福音を伝え、そこに教会を設立した。その後、彼はギリシアのマケドニアとアカイアで設立した教会で教え、地中海を船で渡り、最終的にエルサレムへ到着し、教会で各地での伝道活動の報告をした。ところが彼が神殿に異邦人を連れ込んだというユダヤ人たちの誤解により、彼は捕らえられ殺されそうになったが、駐在していたローマ軍の千人隊長により救い出され、その場でまた福音を伝えることができた。しかしまたユダヤ人たちの陰謀により、いのちの危険が迫っていたので彼はローマ兵たちによってローマ総督のいるカイザリアに護送された。そこで二年の間獄中に据え置かれたが、パウロの訴えにより彼はローマで皇帝カエサルのかきを受けるとなり、ローマに護送された。途中で船が難破して死の危険があったが、彼と船に乗っていた一行は守られ、ついにローマへ到着し、彼は軟禁状態であったが、そこで自費で自分の借りた家に住み、自由に教会の信徒たちと交わり福音を伝えることができた。この期間は二年であった。→使徒の働き19～28章 この間に彼は他の教会への手紙とともにエペソ人への手紙を書いたのである。これは獄中書簡と言われている。その内容はパウロたちが開拓伝道した小アジアのエペソを含む各教会に間違った教えを伝える者(異端)が出てきたので、パウロは手紙を書く必要を覚え、信仰者として正しいの生き方、そして教会とは何かということを教え、正しい信仰生活を送るよにとの勧めと励ましを書いたのである。

[1-2]「さて、あなたがたは自分の背きと罪の中に死んでいた者であり、かつては、それらの罪の中にあつてこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊に従って歩んでいました」

「背き」とは神に逆らう生き方で自分ではそのことを自覚せず、これが普通だと思っていることが多い。

「罪」とは最初の人間アダム以来受け継いでいる自己中心で、天地万物を創造され、人間を造られ、愛しておられる神を認めず、神に反逆する性質、その思い。

「死んでいた」…これは霊的な死。神との生きた交わりから断絶していること。

生まれつきの人間は、アダム以来の罪の性質とその罪の結ぶ悪しき行いの中で神から離れ、靈的に死んでいる。

「この世の流れに従い…歩んでいました」…死んだ魚が川の流れに従って流されていくように、この世の軽薄な風潮、悪しき習慣、罪を罪とも思わぬ生き方に従って生きていた。

「空中の権威を持つ支配者」…サタンのこと

サタンは靈的存在であり、最初の人間アダムとエバを誘惑し墮落させた張本人であり、神を知らず、神に反抗する「不従順の子ら」の中に今も働いている。

[3]「私たちもみな、不従順の子らの中であって、かつては自分の肉の欲のままに生き、肉と心の望むことを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした」

パウロはエペソ人だけではなく、その対象をすべての人に広げる。「肉の欲」…生まれつきの欲望

「御怒り」…誤りやすく、かたよりやすい人間の怒りではなく、罪の中に生きる人間に対する聖く正しい神のさばきとしての怒り。

[4-5]「しかし、あわれみ豊かな神は、私たちが愛してくださったその大きな愛のゆえに、背きの中に死んでいた私たちを、キリストとともに生かしてくださいました。あなたがたが救われたのは恵みによるのです」生まれながらにして、神の御怒りを受けるべき者でしかなかった者に、救いの希望が与えられたのは、「あわれみ豊かな神」ご自身の私たちに対する大きな愛のゆえであった。

「背きの中に死んでいた私たちを、キリストとともに生かし」…「生かし」とはいのちを与えるという意味であり、これはキリストによって与えられる新しいいのちのことであり、救いのこと。パウロはここで突如として「あなたがたが救われたのは、恵みによるのです」と書き加える。救いは私たちの側の行いとか努力とか悟りとかによるのではなく、ただ恵みによる。このことはどれだけ強調しても強調しすぎることはない。

[6-7]「神はまた、キリスト・イエスにあって、私たちをともによみがえらせ、ともに天上に座らせてくださいました。それは、キリスト・イエスにあって私たちに与えられた慈愛によって、この限りなく豊かな恵みを、来たるべき世々に示すためでした」

これらはすべてキリストにあって、キリストとともに、である。これらはエペソ1:20のキリストの死よりの復活と昇天に対応したものであり、キリストに起こったことが私たちにも起こ

るということを示している。

キリストは私たちのかしらであり、私たち教会はキリストのからだである。→1:22~23
かしらに起こることは、当然からだにも起こる。それが「ともに」ということの意味。この文はすでに起こったこととして書かれているが、これはキリストのからだなる教会にとっては将来起こることも、すでにキリストがよみがえり、天の座に着いておられるからには、このことはすでに完成しているのだと信仰によってとらえているからである。→ヘブル11:1
「来たるべき世々」…キリストの再臨によって始まる新しい天と新しい地。私たちが救われたのは、すぐれて豊かな神の恵みが今の人生にあらわされて、それで終わってしまうのではなく、来たるべき世々、あとに来る世界において私たちに明らかに示されるためであった。私たちはイエス・キリストによって与えられたこのすぐれて豊かな神の恵み、神の慈愛を今の世においては真の神と救い主イエスの救いを次の世代と周りの人々に宣べ伝え、そして来たるべき永遠の世界においても神の恵みを味わい、神をほめたたえる者となるのである。

[8]「この恵みのゆえに、あなたがたは信仰によって救われたのです。それはあなたがたから出たことではなく、神の賜物です」

「恵み」とは神の自由な自発的な良き働きかけであり、受けるに値しない者に対する過分の御恩寵。そして「信仰」も神からの賜物である。

[9]「行いによるものではありません。だれも誇ることはないためです」

もし、神の救いが私たち人間の側の何らかの行いによって得られるならば、私たちは自分の救いを誇るだろう。しかし、そのようなことで私たちが救いを得ることは決してない。救いは8節で言われたごとく、神からの恵みであり、それは「だれも誇ることはないため」なのである。完全に神に従い、神の求める基準を満たし、完全な愛と正しさを実行しようと努力してもそれは不完全なものであり、神に義と認められ救われる人はいない。→ローマ3:19~24

[10]「実に、私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです」

人間は神による天地創造の第6日目に造られたが、神のようになろうとして墮落し、罪ある者、死すべき存在となった。→創世記3章

しかし、新しい人はキリスト・イエスにあって造られる。→Ⅱコリント5:17、コロサイ3:9~17

そして、そのように造られたのは、単に私たちが幸福になり、問題が解決され、個人的な満足を持つためだけでなく、私たちが「良い行い」をするためであった。しかも神は「私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださった」のである。

人は恵みにより、信仰によって救われる。しかし、これを誤解して、救われた者は良い行いなどしなくてもよいのだと考えて罪の中に居座るならば、それは大変な間違いである。私たちの罪のために苦しみ、鞭打たれ、十字架に釘づけにされ、血を流して死んでくださったお方のために、神のために、教会のために、隣人のために何もしない、したくない。ただ自分の平安や幸福のみを追い求めるというのならばその救いの理解は正しくない。

しかし、では良い行いとは具体的に何か。→ガラテヤ5：16～26

「主よ、イエス・キリストにあって神の作品とされ、新しい者とされた私にできる良い行いとは何でしょうか。どうぞ教えてください、お示してください、そのことを実行できるようにお助けください」と具体的に祈ることも良いであろう。

神はイエス・キリストを救い主と信じ、助け主なる聖霊が与えられ、主に従う私たちのために良い行いをもあらかじめ備えてくださっている。そのことを心から信じて、私たちにできる良い行いに励む者になりたい。